

宮本みち子 著

『若者が無縁化する』  
——仕事・福祉・コミュニティでつなぐ

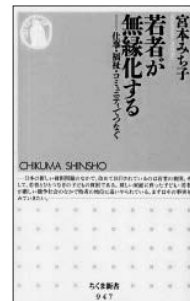
鶴 光太郎

(慶應義塾大学大学院商学研究科教授)

ニート、フリーター、就職氷河期など雇用を巡る若者の問題が取り上げられるようになって随分久しい。しかし、最近、若年雇用は、日本経済の中でもその対応に向けてかなり優先順位の高いイシューとして認識されるようになってきた。例えば、評者が委員として参画し、7月に公表された厚労省の「雇用政策研究会」報告書においても若年の就労支援が最重要課題として議論された。そんな中で、若者を取り巻く現在の状況を多面的に映し出し、包括的な理解を与えてくれる格好の書が本書である。

雇用・労働・社会を描く書物として気を付けなければならないのは、特定の恵まれない、過酷な状況の人々をクローズアップさせて「\* \* かわいそう論」を展開してしまうことである。アドホックな現場の活写が問題の所在を曇らせてしまうことは稀ではない。イギリスの経済学者マーシャルの言葉である「冷徹な頭脳と温かい心」で物事を分析しようとするれば、必ず分析対象の「相対化」が重要となる。具体的には、個々の事例を相対化する「理論的視点」、現在を過去との関係で相対する「歴史的視点」、日本の状況を海外の状況と比較し、相対化する「国際的視点」といった3つの視点が過不足なく盛り込まれている必要があるのだ。その意味で筆者持前の多彩な活動から得られる豊富な事例ともに3つの視点が本書にしっかり埋め込まれているのを見て評者は大変好感を覚えた。

例えば、理論的視点については、第4章で非正規雇用の格差是正の方策として、労働法学者の水町氏が強調し、現在の政策的な方向付けともなっている「合理的な理由のない不利益取り扱い禁止原則」の



●みやもと・みちこ  
放送大学教養学部教授。

●ちくま新書  
2012年2月刊  
新書判・224頁・798円  
(税込)

議論が紹介されているのは目を引いた。また、第3章「崩壊する若者の生き方」で、若年者問題が出てきた背景を「日本型青年期モデルの崩壊」として捉え、「歴史的な視点」からじっくり議論している。さらに、あとがきにも記されているように、近年での筆者の研究において海外における若者の実態、政策調査を精力的に行っており、各章で展開される「国際的視点」も豊かである。

しかし、本書の真骨頂はやはり、第6章「いま若者にとって自立とは何か?」、第Ⅲ部「解決の道」で示されるさまざまな若者支援の具体例の紹介であろう。例えば、社会的存在としての「私」を取り戻すため、半就労・半福祉の「中間的就労」を活用した釧路市における生活保護受給者の自立支援、「地域のおせっかいおじさん・お婆さん」が仕事に就いて働けるように若者に伴走型支援を行うNPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡、アルバイトとインターンシップを合体した有給の教育的アルバイトである「バイターン」を実践する神奈川県立田奈高校などの例である。それぞれが画一的なやり方では必ず隙間から零れ落ちてしまうような問題を丁寧にきめ細かく掬っていることが印象的であった。その意味で第1章で紹介されている野球部に入った中学生が家庭の貧困でユニフォームや靴が小さくなって新調できず、その理由を言えないまま部活、学校、進学から遠ざかってしまったエピソードはきめ

細かな対応の大切さを迫る事例として心に残った。

生活保障を扱う第8章では、広井氏の提唱する「若者基礎年金」（すべての若者に一定金額の年金を支給する制度）を紹介しつつ、「世代間の公平性を高めつつ、同時に若者世代の内部での平等性を高める」仕組みとして、ベーシック・インカムのなアプローチへの親近感も垣間見せている。しかし、どのような事情があるとすれ、「働く」ということに向かうことでしか若者問題の解決の出口はないと評者は思う。若者に限らず、働き方への視点で最も重要と評者が考えているのが「未来に開かれた働き方」である。組織の中で自分の役割は何か、どうすれば

貢献できるか、その結果、どのような「未来」が待っているのか、に対して明確に答えられるような働き方である。言いかえれば、「使い捨て」でなく、自分の「成長」が実感、期待できる働き方といっても良いであろう。しかし、過去20年ほどを振り返ると企業の中での様々な信頼関係が弱まる中で「未来に開かれた働き方」は最も失われてしまった働き方かもしれない。だからこそ、その影響を一番受けているのが若者たちであるのだ。その再構築は容易ではないが、そのヒントは本書にもあると思う。本書を若者の現在を真摯に考えてみたい読者に是非推薦したい。

大内 伸哉・川口 大司 著

## 『法と経済で読みとく雇用の世界』

——働くことの不安と楽しみ

諏訪 康雄

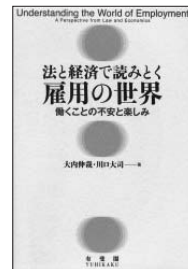
(法政大学大学院政策創造研究科教授)

どんな本か？

身の回りには、普段わかっているつもりでいても、正面きって尋ねられると、きちんと答えられない現象がたくさんある。現在では日本の就業者の9割近くが雇用形態で働くにもかかわらず、「雇用」をめぐる出来事の背景や意味について、どれだけの人が自信をもって答えられるだろうか。

本書は、労働法学と労働経済学の研究者が協働して読みといた「雇用の世界」の物語である。各章の冒頭では現場にありそうな話が「プロローグ」とその後日談として進行する。これを受けて採用から退職、転職までと労働組合活動にまつわる諸事象が解説されていく。体裁は一般人向けであり、読みやすい文章だ。先へ先へと進まずにはいられない。

だが、中身は相当に濃い。雇用労働問題について、報道や政治の場面では即効的な対応策ばかりが求められるがちであるけれども、専門家の視点から検



●有斐閣  
2012年3月刊  
B6判・320頁・1995円  
(税込)

●おうち・しんや  
研究科教授  
●かわぐち・だいじ  
学研科准教授  
一橋大学大学院経済  
神戸大学大学院法学

討すると、そうは簡単に解決できない理由が説き明かされる。また、自分の身にでも起きないかぎり、通常は見すごしてしまったり、なんとなく当然だと思ったりしがちな現象について、その奥や裏に何があるかをさぐっていく。しかも、法学と経済学の課題、視角・発想、考察方法、理論などの違いを浮き彫りにする仕掛けもある。一方の理論から他方の理論を切って捨てるのではなく、建設的に対話しており、結論のバランスにも配慮する。並大抵の力量ではない。まさしく単眼でなく複眼の思考が展開される。そのせいか、著者たちの議論についていこうとすると、かなり頭を使う。

本書を読むことは、知的に興味深く、楽しいし、

読みごたえもある。

### 構成は？

序章から終章まで全15章、各章は平均20頁くらいと、手ごろな長さである。1章ずつ読み進めていくと、雇用の世界だけでなく、労働法と労働経済の基礎も理解ができるように工夫されている。各章の冒頭ストーリーの巧みさや基礎概念の説明コラムとあいまって、半期15回講義という入門的な大学2単位科目の教科書や副読本として使える（当然、それを狙っての章立てだろうが）。以下に、各章の表題を挙げよう（これがまた、洒落ていて、読む気をそそる）。

序章 法学と経済学の協働は可能か——自由と公正のあいだで

第1章 入社する前にクビだなんて——採用内定取消と解雇規制

第2章 パート勤めの苦しみと喜び——最低賃金と貧困対策

第3章 自由と保障の相克——労働者性

第4章 これが格差だ——非正社員

第5章 勝ち残るのは誰だ？——採用とマッチング

第6章 バブルのツケは誰が払う？——労働条件の不利益変更

第7章 残業はサービスしない——労働時間

第8章 つぐない——男女間の賃金・待遇格差

第9章 わが青春に悔いあり——職業訓練

第10章 捨てる神あれば、拾う神あり——障害者雇用

第11章 快樂の代償——服務規律

第12章 俺は使い捨てなのか——高齢者雇用

第13章 仲間は大切——労働組合

終章 労働市場、政府の役割、そして、労働の法と経済学

序章と終章が「総論」にあたり、1章から13章までが「各論」である。これにより、現在の雇用問題の広がりや課題が、ほぼ網羅的に扱われている。

### さわりを示すと？

第6章（労働条件の不利益変更）と第10章（障害者雇用）を例にとろう。第4章では、①経営不振による賃下げや退職勧奨の挿話を導入に、②労働契約の合意原則、不完備契約性、賃金変更の経済学的な意味にふれたのち、就業規則変更論と企業年金減額という現実的に面倒なだけでなく法的にも厄介な問題を論じ、さらには「コースの定理」も補論する。第10章では、①労働災害による車椅子生活化やうつ症状などの挿話を導入に、②障害者雇用をめぐる雇用率方式と障害差別禁止方式の対比をし、効率的な障害者雇用制度のあり方を求め、さらに公平性と効率性の両立を論じる。現行制度の問題点を指摘し、差別禁止法を検討し、付随してメンタルヘルス、労働災害などにもふれる。

このように、事例と法学的説明と経済学的説明が絡みあいながら、多層サンドウィッチのように展開する。読者を飽きさせないようにコラムまで用意されている。歴史や国際比較や環境変化とのかかわりの検討など、さらにふれてほしいことの注文をつけようとすればきりがないだろうが、全体としてよくできた入門書だと感心した。